

**JAPANESE
CIVILIZATION
INSTITUTE**

日本文明研究所

24-5 Sakuragaoka-cho, Shibuya-ku, Tokyo 150-0031
Tel: 03-5456-8082 Fax: 03-5456-8388
Mail: info@japancivilization.org
<http://www.japancivilization.org/>

ニューズレター No. **11** 2018年春号

平昌五輪を目前に控えた2018年2月6日、日本文明研究所の第11回シンポジウム「日本人とスポーツ」が行われました。登壇者は、世界陸上男子400mハードル・銅メダリストの為末大氏、ソウル五輪シンクロ・デュエット銅メダリストの田中ウルヴェ京氏、スポーツジャーナリストの二宮清純氏、モデレーターを作家で当研究所所長の猪瀬直樹が務めました。長らく渦中にある相撲界について、最新のスポーツ科学や、アスリートのメンタル、平昌五輪の行方、東京五輪へ向けて考えるべきことなど、興味の尽きない話となりました。そのシンポジウムの内容を一部転載いたします。（『週間読書人』2018年4月20日第3236号ならびにWEB読書人より転載）



ごあいさつ

評議員兼日本経済大学学長 都築明寿香

日本文明研究所は、日本の文化・文明を日本だけではなく世界に発信していくということを目的に、2年前に設立させていただき、活動を続けてまいりました。今回は世界的にも著名なアスリートである為末大さまと田中ウルヴェ京さま、そして著名なスポーツジャーナリストの二宮清純さまにパネリストとしてお越しいただきまして、平昌オリンピックと、2020年に控えている東京オリンピックにも関連いたします、スポーツと国家について、またスポーツと日本人について、お話をいただきます。

皆さまの関心も非常に高いこのテーマを、パネリスト3名と所長の猪瀬先生にリードをしていただきながら、活発な議論になるかと思っております。短い間ではございますけれども、最後までお付き合いいただき楽しんでいただければ幸いです。（談）

フェアプレー精神と日本人アスリート

会長 後藤俊夫

オリンピック、スポーツと日本人と言われて想起されるのは、フェアプレー精神です。古い話になりますが、第二次世界大戦前に海外で活躍したスポーツ選手たちの話を交えて簡単にお話したいと思います。

まず最初はテニスの清水善造選手です。今や日本人テニスプレイヤーといえば錦織圭選手ですが、日本人として初めてウィンブルドンでベスト4に入ったのが清水選手なのですがご存知でしょうか。清水選手のエピソードとして有名なのが「柔らかいボール」の話です。試合中に相手選手が足を乱し、ひっくり返ったとき、強い球を打てば当然勝つところを、あえて柔らかい球を打って相手が立ち上がるのを待ったのだそうです。相手を潰すのではなく正々堂々と戦うために相手に猶予を与えた。このフェアプレーの精神がいたく欧米人の心に響き、当時、賞賛されたのだそうです。

もう1つは1936年第11回ベルリンオリンピックの棒高跳びでの話です。棒高跳びでは日本人2人で2位、3位争いとなることになったそうですが、棒高跳びは競技時間がかかるため、長く争うのはやめて2人とも同位にしようということで、銀と銅を貼り合わせたメダルが授与され、今でも日本で保存されているそうです。このように埋もれた歴史を掘り起こすことで、たくさんの素晴らしい日本人アスリートが世界で活躍したことがわかります。

スポーツにおいてフェアプレーというのは非常に重要です。日本のサッカー選手は反則が少ないことで世界でも有名だと聞きますが、日本人アスリートにはフェアプレーの精神が身についている人が多いように思います。それも日本人の勤勉実直な精神性に関係しているのかもしれない。（談）

日本人とスポーツ

為末大 × 田中ウルヴェ京 × 二宮清純

モデレーター

猪瀬直樹

神事、スポーツ、興行 相撲界の現状

猪瀬 年末から、貴乃花を中心に、相撲界がワイドショーを騒がせています。しかし暴行事件で横綱・日馬富士が辞め、理事候補選挙があつても、何も変わらなかったのではないか。

貴乃花親方のHPの二月一日付の日記には、「私の現役当時と比較して、現在は力士の数が大きく減少しています。この先、相撲は残つても、相撲協会に残れるとは限りません。その危機感を、私は強く持つています」と書かれています。

二宮 相撲人口が減っていることは間違いありません。平成元年から一〇年ぐらいまでは新弟子が年間一三〇〜一四〇人ぐらいいて、若貴ブームで二〇〇人を超える年もありました。が、現在は七〇人前後です。

二〇一〇年に貴乃花が理事に立候補したとき、うったえたことがあります。二〇〇八年に改訂された中学校学習指導要領で「武道（柔道、剣道、相撲）」が必修科目となりました。が、柔道や剣道に比べて、相撲は指

導者が少ない。さらに言えば土俵が少なく。私の子どもの頃は、神社の境内や学校、あちこちに土俵がありました。今はそうした場所が非常に少なくなっていますよね。そのことに親方は危機感を感じて、相撲協会が普及のためのバックアップをしなれば、という提言をしたんです。猪瀬 確かに僕が子どもの頃、男の子はみな相撲を取って遊んでいました。相撲をしたことがない現代の子どもたちは、テレビで相撲の決まり手を見ても分からないでしょうね。

二宮 まず普及があつて、育成があつて、強化だろうと。その土台が細つてしまつたら、強い力士は出ません。貴乃花親方の問題提起は間違っていないかと思いますが。

猪瀬 理事候補選挙は、貴乃花が初出馬した二〇一〇年と今回では、投票の仕方が違いますね。二〇一〇年は記号式でしたが、今回は記名式だから、筆跡で誰が入れたか分かつてしまう。

二宮 二〇一〇年以前は選挙とは名ばかりで、一門の票割が事前にでき上がっていたんです。ちょうどその頃、朝青龍の一連の不祥事や、新弟子が暴行を受けて亡くなった時太山^{ときたいざん}



為末大氏

事件もあつて、組織改革が急務でした。それで当時の文部科学副大臣が、選挙を一門の忠義を示す儀式にしていけないと。ところが、せっかくの投票改革が、元に戻ってしまった。今回はこうした背景がなくても、貴乃花親方は選挙に負けたとは思いますが。

猪瀬 八百長の問題も根深くあります。相撲は興行でもあるから全てをきれいにするのは、なかなか難しいと思うけれど……。

二宮 日本相撲協会は、二〇一四年に公益財団法人になりました。それによって、一般の企業でいうところの法人税が、かなり免除されている、優遇された組織です。公益財団法人

である以上は、公益化を担保するところが内閣府から厳命されています。その責任意識を高めねばなりません。大相撲は伝統文化ですから、守るべきものと変えるべきものの仕分の必要があると思います。先ほどの貴乃花親方の主張にも重なりますが、最も大事なことは、協会の定款第三条「目的」に書かれていると思うんですよ。「この法人は、太古より五穀豊穡を祈り執り行われた神事（祭事）を起源とし、我が国固有の国技である相撲道の伝統と秩序を維持し継承発展させるために、本場所及び巡業の開催、これを担う人材の育成、相撲道の指導・普及、相撲記録の保存及び活用、国際親善を行うと共にこれらに必要な施設を維持、管理運営し、もって相撲文化の振興と国民の心身の向上に寄与すること」を目的とする」と。もつとも重要なのは、「相撲文化の振興と国民の心身の向上に寄与する」ということです。この意識を高めなければいけないというのが、貴乃花親方の思いでしょう。

猪瀬 理事選が終わって、新体制となる中で、何の改革をしていくのか、明示する必要がある。相撲は伝統的



田中ウルヴェ京氏

な神事でありながら、スポーツでもある、興行でもあるところが複雑です。そして、年間九〇日も頭からぶつかりあっていたら、力士たちの体が持たないという問題もある。

二宮 年六場所、各十五日間で九〇日ですよ。若乃花や小錦などは、五場所でもいいという意見です。もう一つ、巡業を減らすという案もありますが、難しいのは、まさに国民への普及が巡業の意義であるということ。その際にまず考え直すべきは、公傷制度ではないかと思います。

猪瀬 以前は公傷制度があつて、場所中に怪我をして休場しても、番付は変わらなかったんですよ。

二宮 ところが北の湖理事長のとき

に、公傷制度を取り止めました。ただ、その理由も分からないではない。たびたび怪我をしては怪しい診断書を持つてきて、休場するという力士もいなくなりました。でも公傷制度がないと、やむをえず怪我を負った力士もダグツと階級が落ちてしまいます。

猪瀬 栃ノ心も靱帯を損傷して、関取から幕下まで落ちていますからね。

二宮 公傷制度というのは、保証制度です。例えば今回も、暴行を受けた貴ノ岩が休場し、前頭から十両まで下がりました。普通に考えれば傷害事件なので、酌量の余地があつてもいいと思います。

猪瀬 僕が子どものときは年四場所、栃若時代に六場所になったのかな。六場所はすごいと思いましたよ。ただ古い映像を見ると、大鵬や柏戸は土俵に手をついていない。つまり頭からぶつかっていないんです。それがいつの間にか頭からぶつかるようになったから、これは怪我をして当たり前ですよ。

二宮 幕内の平均体重も増えている中で、リスクがあるのは事実ですね。スポーツである一方で、神事であるし、興行でもある。この危うい三



二宮清純氏

猪瀬 年寄株ですね。

二宮 定款では、年寄名跡は売り買いしてはいけないことになっていきます。でもかつては三億ぐらいで売り買いされていた時期もありました。

今はそれほどではないと思いますが、これは既得権益化しています。この問題に手を付けるのは大変です。

猪瀬 大相撲の裾野を広げるための、前向きな話は出ているんですか。

二宮 現時点では出ていないように思います。

少子化で、しかもスポーツが多様化している中、リンチもどきのことが起きる業界に、親が子どもを入れるかといえば、疑問ですね。

一〇〇m九秒九八 陸上競技界の現状

猪瀬 為末さん、陸上競技は裾野が広がってきたように感じますが、選手の育成の現状はどうですか。

為末 短距離が強くなってきた、うまくいっていると思います。

猪瀬 桐生祥秀選手に、一〇〇m九秒九八が出たね。

為末 そうですね。海外の選手からよく言われるのは、日本の陸上競技

は、コーチと選手はレベルが高いけれど、全体の戦略で失敗することが多いと。日本はどうしてもメンバーシップ型になり、一度陸上に入ったらずっと陸上畑で、途中で人の入れ代わりが少ない。その利点として、一丸になりやすいという側面があります。悪い点は相撲界にもつながるかもしれません、組織的な改革に対する柔軟性がないこと。でも現場の個々のコーチや選手のレベルは高くて、職人的な緻密な闘い方をしている。

猪瀬 日本の軍隊は下士官がよくて、アメリカは将校がよく、イギリスは大将がいい、とはよく言われたことだけど、陸上競技団体の中でも同じことが言われているんですね。

ところで、「走る哲学者」という異名を持つ為末さんは、今は何に取り組んでいるんですか。

為末 僕は、スポーツとテクノロジーの組み合わせに興味を感じていて、Depotare（デポタール）という会社を立ち上げ、様々なプロジェクトに携わっています。その一つで、Xiborg（サイボーグ）という義足開発の会社を、東京パラリンピックに向けてサポートしています。

最近、ナイキが新しいマラソンシューズを出しました。カーボンが波型の形状で靴底に入り、バネのようになって足を押し出すエネルギーを高める構造です。これとほとんど同じ構造で、ひざ下までカーボンで作ると、義足になります。器具やテクノロジーによって、人間の能力を引き上げたり、上達を早めるために利用したり、会社組織として、そうしたプロジェクトのサポートをしています。

猪瀬 パラリンピックの陸上一〇〇mの選手が、オリンピック選手の記録を塗り変えるときがくるかもしれない、と言われていますね。実際、その可能性がありますか。

為末 将来的にはあると思います。一〇〇mは時間がかかると思いますが、幅跳びは二〇一五年のIPC（国際パラリンピック協会）陸上競技世界選手権でドイツのマルクス・レーム選手が、義足で八m四〇を跳んでいます。これが二〇一二年ロンドン、二〇一六年リオデジャネイロ、両オリンピックの金メダル記録より跳んでいるんです。走り幅跳びは、もしかしたら二〇二〇年にはパラリンピック選手の方が、遠くに跳んでいる

二宮 そのために理事候補選挙も、最終的には評議委員会が選任するかたちになっています。評議員は外部四人、内部三人の構成になっています。評議委員会が、理事会の追認機関になってはいけないということですよ。その課題は、今回散見されたと思います。

そして本格的に角界の闇の問題に手を付けようというのであれば、「年寄名跡」の問題でしょうね。



猪瀬直樹所長

可能性があるということです。
ただ、昔、棒高跳びのセルゲイ・ブブカさんが来日したときに、僕も高校生で若かったので、ちよつとブブカさんのボールを拝借したことがあるんです（笑）。後で、ちゃんと戻したのですが。当時の日本チャンピオンに、それで跳ばせてみたのですが、ボールが硬すぎて曲げられませんでした。だからたぶん義足についても、その性能でひとしなみに成績が上がるというよりは、世界で一人か二人しか使いこなせないような義足を、使いこなせる肉体の持ち主だけが、新たな世界に到達できるということになるんでしょう。

猪瀬 テクノロジー一般ではなく、

個人のパフォーマンスとテクノロジーの進化とが結びつくような、新しい領域があるということですね。

為末 面白いのは、義肢装具士という、義足を肉体に装備させる職業があるのですが、その分野で日本人の評価が高いことです。個々人のパフォーマンスを見ながら、数字に落せないような部分を、全体のバランスを見ながら微調整する能力に長けている。メジャーリーグにも日本人のトレーナーが増えています。パラリンピックの世界も、各国選手の義足をサポートするのはみな日本人という日がくるかもしれません。

メンタルトレーニングとは？

猪瀬 話を戻しますが、稀勢の里は、五場所連続休場（※三月に入り六場所休場が決まった）。横綱は降格はないとはいえ、このまま力士生命が終わってしまわないか心配です。稀勢の里の部屋は、親方の隆の里が亡くなって、元関脇・若の里が西岩親方として跡を継いだわけですが、いろいろあつて今年二月一日に西岩親方は

田子ノ浦部屋から独立して、現在は元前頭の隆の鶴が継いでいる。つまり、稀勢の里の親方は、実質いないに等しいですよ。追い詰められた横綱に、適切な指導をできる人が周りにいないのではないかと。

二宮 白鵬も同じ立場ですね。相撲界の親方と弟子は親子の関係で、親方の意見は絶対なのですが、とはいえ横綱に対して、平幕ぐらいの力量の親方ではなかなか力にならないと猪瀬 それでは逸材がもつたいないよね。

田中 ウルヴェ京さんは、もう三〇年も前になりますか、ソウル五輪で小谷実可子さんとのシンクロデュエットで、銅メダルを取りました。シンクロ界のパイオニアです。現在は、メンタルトレーニング上級指導士ということですが、例えば稀勢の里に対してもアドバイスできるのですか。田中 相撲とは長らく、メンタルトレーニングで関わらせてもらっています。阿武松親方（元関脇・益荒雄）などは、まだ日本で、メンタルトレーニングが一般的でない二〇〇〇年ぐらいから、「心技体」のうちの「心」こそはとても大事だから、科学的な根拠を伴った知識を得たい

とおっしゃって。

猪瀬 阿武咲は、阿武松部屋だよね。まだ二十歳そこそこで、活躍しているね。

田中さん、ここでメンタルトレーニングの実践を、何かできますか。田中 まず、逆に私から伺いたいのには「メンタルって何ですか？」ということ。猪瀬さんなら、どうお答えになりますか。

猪瀬 気分を意識的にコントロールすること。

田中 メンタルは本来、単に「ころの」という形容詞です。もう一つ、猪瀬さん「メンタルってどこですか？」

猪瀬 頭かハートか。

田中 両方言ってくださった。その通りです。感情と思考を司る脳（頭）と、その影響を反応として受ける心臓（ハート）ですね。メンタルのトレーニングは、思考と感情に気づき、それを整理するトレーニングが基礎にあります。猪瀬さんは日頃、焦ることはありますか。

猪瀬 時間通りに出たはずなのに、渋滞につかまって遅れそうになっただけだと、イラッとするよね。

田中 そういうときにはぜひ、「僕

は今、渋滞につかまって、イラッとしている」と言語化していただきました。メンタルトレーニングの最初の一步は、感情の言語化です。

それをするによって、前頭前野で建設的な思考が動き、建設行動を促すきっかけになる。そのとき同時に、鼻で息を吸い、口で細く長く吐く深呼吸をすると、副交感神経の働きが優位になり、体が弛緩します。

猪瀬 交感神経が高ぶった状態だから、深く息を吐いて、副交感神経を働かせると。

田中 はい。でも、それはまず自分がイラついていることを認めないと、行えないんですよ。

ここで会場の皆さんにお聞きします。今あなたは、コンビニでおにぎりを一つ買おうとしています。急いでいるのに、二台のレジへの並び方はY字式ではなく、レジそれぞれに長い列ができています。どちらに並ぼうか悩んで、あなたは左の列に進みました。並んだ瞬間、右の列がサーッと流れました。

猪瀬 よくあるね。
田中 さてそのときあなたは、「①イラつきますか」、それとも「②落ち込みますか」。説明を加えると、

①は、例えば「なんでY字式じゃないんだ」「左のレジは研修とかいって、こんな込む時間に新人入れるなよ」などと思う方です。一方の②は、たかがレジですが、「自分は運が悪え、右に行っておけばよかった。今日は会議でも失敗するだろう」などと思う方。どちらかを選んでください。

はい。これが、感情のイメージ化をした、ということになります。これから同じようなことがあったときには、周りを見渡してみてください。つまり、シチュエーションが私たちを怒らせたり落ち込ませたりするのはなく、そのことをどう捉えるかによりますよ、ということ。自分が怒ることに決めている、あるいは自分が落ち込むことに決めているんです。というのが、メンタルトレーニングの導入例になります。

為末 状況に善悪はなく、その善悪を決めている自分の認識があるということでしょうか。あとは自分の癖を知ること。選手が試合でミスしたときに、どうそこから脱却するかと。

田中 はい。例えばレジの列にイラ

「べき思考」があつたりします。「列はY字で並ぶべきなのに」と。落ち込む理由の一つには、「どうせ思考」という表現があります。

猪瀬 「どうせ思考」と「べき思考」、二つの思考を、スポーツ選手がどう自覚するか、ということ？

田中 自覚した上で、感情を出す、という練習ですね。感情を質感で受け止める練習、と言った方がいいでしょうか。ちゃんとイラついたり、ちゃんと焦ったり、ちゃんと落ち込む。その選択行動を作っていくということ。

猪瀬 「べき思考」の人は、例えば怒って帰ってしまうところまで、いいのかな？

田中 帰ってしまうのは表出行動です。コンビニならば帰ってもいいのですが、試合でミスジャッジされて、怒って帰ったら負けてしまう。ですから、表出行動と感情は一体ではない、ということを知る訓練が必要になります。怒ったから去るのではなくて、怒った上で行動は変えられると。

猪瀬 なるほど。感情と行動の間を意識するということですね。

トップアスリートのメンタル

猪瀬 それは自分を客観化するということ？

田中 自己内省力と自己客観力と両方必要です。メンタルのトレーニングをすると、自分の感情の予期もできるようになります。トップアスリートは、怒りをエネルギーにすることもあります。満足はアスリートにとって、あつてはいけない行動です。「あ、もう勝てる」などと思つたらいけないので、安心しない練習もします。トップアスリートにとっては、怒りも、焦りも、緊張も、大事なエネルギーですから、無意識に吐き出してしまつたらもつたいないんです。マイナス感情を利用したい。でもまづは、吐き出すというプロセスを経て、利用するところへ持つて行きま

す。
猪瀬 僕もオリンピック招致のときに、明日絶対に勝たなければと思つたら大変なプレッシャーだったけど、為末さんや田中さんは、試合の前にいつも大変なプレッシャーを感じていたでしょうね。



為末 子どものときは、大人になると緊張しなくなると思っていました。結局、最後のレースまで緊張しましたね。ただ緊張はしても、わけが分からなくなるようなことは、なくなっていた気がします。だんだんに、いい状態でハードルを跳んでいく自分のイメージを、一か所にペグし続けられるようになった、と言いますか。緊張すると、その場から離れて昔の記憶になったり、未来への心配になったり、他人の目が怖くなったりしていたのが、ちゃんとここに自分を結びつけられるようになった。っていった。

僕は自分観察とか、先ほどの感情のイメージ化なども嫌いではないですが、そういうことを得意としない選手は、同じミスを繰り返してしまいう傾向があるかもしれません。

田中 場数を踏めば、経験則で勝てるというわけではないんですよね。自分に向き合わない限り同じことを繰り返してしまう。

猪瀬 それ、稀勢の里だよ。

田中 私は、稀勢の里はメンタルが一時期、強くなりすぎて、心身のバランスが崩れて怪我をした、と見ています。心身は両方がうまくシナジ

ーしていかなくてはいけない。情熱や大義が強くなり過ぎたときに、「心技体」のトライアングルが壊れ、実力を発揮し過ぎて、身体を壊すことがあるんです。その状況に気づければ、いい経験として次にいけるのですが。思考と感情と、実際に起きたことの整理をするだけで、稀勢の里のようなトップアスリートは、シナジーできると思います。

猪瀬 無意識に臨んでいるうちは勝っているのに、メダル確定と注目され、オリンピックで勝てない選手がいますね。その辺りはどうですか。

田中 メディアはプレッシャーという言葉をよく使いますが、プレッシャーとか、オリンピックの魔物とか、それは存在しないものです。感情をどう捉えるかによって変わってくる、その意味では、選手には毎日自分の最悪な状況をイメージする、というようなトレーニングをして欲しいですね。

私はオリンピックまであと二週間、というときには、水着が外れてしまったイメージとか、鼻栓が取れたとか、水中スピーカーから急に曲が聞こえなくなったとか、朝起きたら三十八度の熱で決勝を迎えるとか、わ



ざと悪いことを考えてどう対処するかという、メンタルリハーサルを毎日していました。マイナス思考を使つてこそ、トップアスリートです。

二宮 現在、柔道の日本代表監督を務める井上康生が、金メダルを取ったシドニー大会で、山下泰裕監督に「オリンピックには魔物が棲んでいるんですか」と聞いたそうです。山下監督は「強ければ勝つ、弱ければ負ける、それがオリンピックだ」と井上はそれで気が楽になったと言うのですが、分かりやすいですね。魔物なんて、負けた人間が言うことだと。

為末さんにお聞きしたいのですが、経験はパフォーマンスを引き出すためにプラスに働くこともあれば、重荷になることもあると思うんです。例えば、バルセロナオリンピックの女子二〇〇m平泳ぎで、岩崎恭子さんが十四歳で金メダルを取りました。あれは怖いもの知らずだったから、取れた面もあると思うんですよ。一方で柔道の谷亮子さんは、世界選手権であれだけ金メダルを取っているのに、オリンピックでなかなか勝てなくて、三回目でやっと金メダルを取った。経験を肥やしにする例と、

経験が重荷になる例があるように感じられます。

為末 これは興味深い問いです。僕が銅メダルを取ったのは世界陸上で、オリンピックは三回出てどれも外しているんです。最後に出たのは北京五輪ですが、選手村の食堂でたくさんの選手たちを見ながら、結局知らないか知り尽くすか、どちらかしかないのではないかと、思いました。そしてこれは、オリンピックだけに当てはまる話でもないと思っています。

二宮 競馬もそうかもしれませんね。ビギナーズラックで勝って、知り始めると負ける。

田中 最近で言うと、ボクシングの比嘉大吾さん。先日、明るくKO勝ちしましたよね。対照的なのは、村田諒太さん。比嘉さんは今のところメンタルトレーニングは必要ない。でも知り始めたときに、今度は「心技体」全ての質感をもって勝ちたい、という欲が出てくるでしょう。つまり、自分との向き合い方を知りたい、と。

為末 「ムカデのジレンマ」という寓話があります。百足が歩いているのを蛙が見て、「すごいね、どうし

てそんなにたくさん足の足で、上手に歩けるの」と誉めるわけです。百足は、こんな簡単なだよと、はじめて自分の足を意識して歩いたら、からまって転んでしまう(笑)。考えてしまったが最後、全ての足を知り尽くすしかない、ということですよ。

二宮 余談ですが、昔、大洋ホエールズに平松政次というピッチャーがいました。「カミソリシートの平松」と呼ばれて、長嶋キラードだったところがあるとき長嶋さんが、平松さんのシートボールに、バットからバットと手を放して、グリップを中腹まで上げて、ヒットを打ったんです。平松さんはひどくショックだったそうです。「巨人の四番の長嶋さんが、バットを短くもってヒットを狙ってくるなんて」と。そのことを試合後本人に言うと、長嶋さんは「えっ、今日おれ四番だったっけ」(笑)。集中力は欠落力の裏返しだと思いますが、長嶋さんの欠落力は才能ですよ。

選択と集中、あるいはスポーツ文化の多様性

二宮 二〇一八年開催国の韓国は、

一九四八年のサンモリッツ大会から二〇一四年のソチオリンピックまで、冬季五輪で計五三個のメダルを取っています。金二六、銀一七、銅一〇、これが全てスケート種目なんです。

今、日本のスポーツ界は、選択と集中をはかる方向に、進もうとしています。韓国のやり方を成功例のように言う人がいるけれど、僕は疑問です。

日本の男子フィギュアスケートでは、二〇一〇年バンクーバーで高橋大輔選手が、初めてメダルを取りました。その次のソチで羽生結弦選手が、初めて金メダルを取った。日本がオリンピックにフィギュアスケートの選手を初めて送り込んでから、八十二年の歳月経っています。男子のフィギュアは、どうせメダルは取れないのだから、強化など止めろという意見がずっとありました。もしそこで止めていたら、高橋選手や羽生選手は出なかった。

陸上短距離もメダルなど取れるはずがないと言われてきたけれど、リオオリンピックで、男子四×一〇〇mリレーでは、銀メダルを取っている。一〇〇mで、東京オリンピックでメダルは難しいかもしれないけれど、

ど、ファイナリストは出るかもしれません。スポーツは促成栽培的に、今日種をまいて明日花が咲く、というほど単純ではない。長い目で見るのが、今後必要になってくるのだろうと思うんです。

為末 一〇〇mの決勝出場は、ハードルのメダルより難しいと思います。陸上の中での複雑系は、走る競技でいうとハードル、跳ぶ競技では棒高跳びや三段跳び、投げる競技ではハンマー投げです。逆にシンプルなものは砲丸、幅跳び、一〇〇mで、これらのメダルは日本にはない。であれば、選択と集中で複雑系を強化するというロジックがあります。

一方で純粋数学のように、純粋ゆえに難しい問いに臨むことで得られた知見が、他分野に広がることもあります。例えば体操のレベルが上がれば、エアリアルや高飛び込みなど、ほかの回転系のレベルも上がるといふ側面もあるわけです。

単純に個々の種目のデータだけを見てみると、気がついたときには足元がぐらぐらしている、ということになりかねない。そのバランスは難しいですが、短期で成果を求める方向にばかり向かうと、競技の根本的

なパフォーマンスアップの研究がおろそかになって、そこから次第にスポーツ界全体の力が落ちていくことになる気がしますね。

猪瀬 日本の陸上競技界で、一〇〇m九秒九八が出たのは、これまでのデータが解析されたり、コーチのトレーニング技術や、メンタルトレーニング技術など、いろいろなものが重なり合った成果ですよ。

田中 一人の金メダリストを出すためには三人の金メダルに近い選手を育成する必要がある。また、その三人それぞれに三人のライバルが必要である、という計算をしていくと、結果三〇数人のほぼ金メダルが取れる資質の選手を育てないと、一人の金メダリストが出ない。そういうロジックをイギリスのオリンピック委員会が発表しています。

ただ、国の政策として、それだけ多くの人材を、一つのコメダルのためだけに終わらせていいのか。競技引退後の選手個人のセカンドキャリアという話ではなく、メダルを取れなかった選手も、取った選手も、オリンピックから出られなかった選手も、このキャリアから次のキャリアをどう育てていくか。そのとき、焦点に

なるのがメンタルです。メダルを目指すほどのメンタルを、引退後、例えば企業など全く違うキャリアに生かすにはどうすればいいか。フィジカルやテクニカルは、指導者になる以外、別のステージでは使いにくい。でもメンタルに関しては、コミュニケーションや、課題解決能力に使えます。現在、スポーツ選手として培われたものを見出すプログラムができていて、可視化も可能です。そうしたキャリアプログラムが、国際オリンピック委員会でも始まりましたし、自国開催をする東京でも、早急に整えていかなければならないと思っています。

二〇二〇年 東京オリンピック 文化へ活かす力

猪瀬 ギリシャで始まった当初のオリンピックは、スポーツだけが対象ではなく、文学、芸術を含めた宗教行事でした。我々が持つている様々な知能や知性を、文明へ返していくこと、文明の発展のためにオリンピックというものがあったということですね。

為末 僕が会社の名前にした「デポルターレ」は、「スポーツ」の語源となったラテン語です。詩を読むとか、歌を歌うというのも、デポルターレに含まれていたと言われています。いろいろな解釈がありますが、自分ならではの方法を使って精いっぱい表現する、といった意味ではないかと捉えています。

現在は競技場で走っている人を観戦する、映画館で演じている人を観るという鑑賞型の娯楽から、自分で走ってみる、自分をインスタグラムで撮ってSNSに上げるというような、自己表現型にシフトしてきているように思います。二〇二〇年のオリンピックが、それぞれの人が精いつばいの自己を表現する方向へ向かえば、面白いものになるのではないかと思います。

二宮 IOC憲章では、オリンピックは個人の闘いであり、国同士の闘いではないと銘打たれているんですが、日本だけでなくこの国の新聞にも、必ずメダル総数の上位国が掲載されますよね。不思議なのは、金メダルが多い方が上位と考えられていること。たとえば金メダルが三つで銀一つ銅一つが、金二つで銀十個

銅十個よりも上になる、金本位制がここに生きている（笑）。ただ、メダルの数だけではなく、それ以上にどれだけの種目で成績を残せたか、ということが、スポーツ文化の幅広さを示す上では重要だと思いますね。それから、パラリンピックですよね。高齢化社会の日本において、高齢者の環境整備と、障害者のスポーツ環境の整備とは親和性が高いですから、その点からも、これからパラリンピックはより重要になってくると思います。

スポーツの価値の中には、精神浮揚効果がある。ただ、それは数値化できない。精神浮揚効果を暗黙知から形式知へと高める方法を、これから現実的に考えていかなければいけないのではないのでしょうか。

為末 三浦梅園という人に「枯れ木に花咲くを驚くより、生木に花咲くを驚け」という言葉があります。ハイドルで一〇〇分の一秒速くなるのも、面白い世界ですが、未だにロボットがコップを持つことが難しい、それなのに、人体はなぜコップを触った瞬間にこれ以上握つたらだめだと、しかも話しながら分かるのか。スポーツ選手のすごさより前に、人

体のもつ当たり前の機能のすごさを、引退してから感じるようになりました。そういう当たり前が当たり前で終わらない、思考のきつかけが、例えばスポーツで得られると面白いですね。

田中 小谷実可子さんという一〇〇年に一人の逸材と同一年で、一〇歳のときから一緒にシンクロをやっていました。一度、全日本でソロで勝ったことがあります。翌朝の新聞に「田中優勝」ではなく、「小谷負けた」と。ソウルオリンピックもソロで出たかったのに、ソロは負けてデュエットで銅メダルをいただきました。正直、自分にとってシンクロとは何なのか、とずっと考えていました。そのおかげで心理学を勉強するようになりました。スポーツで悔しい思いをしたり、勝って調子に乗ったり、自分の存在意義に疑いをもったりといった思考や感情の質感の重い経験をできるのがスポーツです。どんな経験も自分に向き合うきっかけになるということを、伝えていきたいと思っています。

猪瀬 スポーツに関わると深くなるんだね。生活の次元やビジネスの次元と違うところに一度身を置くから。

それはスポーツだけではなくいけれどね。スポーツが我々に返してくれるものに、我々は選手へのリスペクトをもって返していく。そのためには、資金援助とか応援、支援が必要だし、ボランティアでオリンピックを盛り上げることも必要ですね。そして何より、皆さん一人一人が、東京オリンピックをきっかけにスポーツに親しんで、健康を培って欲しいです。
(文中敬称略)
『週間読書人』二〇一八年四月二〇日第三二二六号ならびに『WEB読書人』より転載)

パネリスト紹介

為末大 (ためすえ・だい)

世界陸上男子400mハードル銅メダリスト、リポーター、デポルターレパートナーズ代表、新豊洲ブリランニングスタジアム館長

1978年広島県生まれ。スプリント種目における日本初の世界大会メダリスト。シドニー、アテネ、北京の3つの五輪大会出場。男子400mハードル日本記録保持者。現在、スポーツとテクノロジーに関するプロジェクトを行うデポルターレパートナーズ代表を務める。競技に打ち込む独特のスタイルと自分を見つめて視察する姿が感銘を呼び、走る哲学者と呼ばれる。著書に『走る哲学』『あきらめる力』『走りながら考える』など。

田中ウルヴェ京 (たなか・うるゐ・みやこ)

メンタルコーチ、IOCマーケティング委員、ソウル五輪シンクロデュエット銅メダリスト、日本スポーツ心理学会認定スポーツメンタルトレーニング上級指導士

1967年東京都生まれ。1988年ソウル五輪シンクロデュエットで銅メダルを獲得、1989年～99年、日本代表チームコーチ。アメリカ五輪ヘッドコーチアシスタント、フランス代表チーム招待コーチなどを歴任。91年より渡米し、95年米国セントメリーズカレッジ大学院修士課程修了後、アーゴジー心理専門大学院などで認知行動療法を学ぶ。2001年に起業後はプロスポーツ選手から一般までメンタルトレーニングを指導、企業研修や講演等を行う。車椅子バスケ男子日本代表メンタルトレーニング、メンタルコーチ、なでしこジャパン女子サッカー日本代表のメンタルコーチ、報道番組レギュラーコメンテーターも務める。フランス人の夫を持つ2児の母。著書に『99%の人がしていないたった1%のメンタルのコツ』(共著)、『1日30秒でできる新しい自分の作り方』『人生最後の自分に出会える感情ノート』『こころに強くなる自分コントロールの法則』など。

二宮清純 (にのみや・せいじゅん)

スポーツジャーナリスト、株式会社スポーツコミュニケーションズ代表取締役、楽天イーグルス経営評議委員

1960年愛媛県生まれ。スポーツジャーナリストとして世界各国でオリンピック、サッカーW杯、メジャーリーグ、ボクシング世界戦などを取材する中で日本にスポーツが文化として根付いていないことを痛感。人間が生み出したかけがえのない文化であるスポーツを多くの人が楽しめることを願い、インターネットマガジン「スポーツコミュニケーションズ」を開始。日本サッカーミュージアムアドバイザーボード委員も務める。著書に『スポーツ名勝負物語』『勝者の思考法』『変わらない組織は滅びる』ほか多数。新刊に『昭和プロ野球の裏側』(共著)。

猪瀬直樹 (いのせ・なおき)

作家。1946年生まれ。87年『ミカドの肖像』で第18回大宅壮一ノンフィクション賞を受賞。『日本国の研究』で96年度文藝春秋読者賞受賞。2002年小泉首相より道路公団民営化委員に任命される。07年6月東京都副知事に。12年12月に東京都知事に就任。13年12月辞任。15年12月に大阪府市特別顧問に就任。代表作に『昭和16年夏の敗戦』『ペルソナ三島由紀夫伝』『ピカレスク 太宰治伝』。近著に『救出』『戦争・天皇・国家』『民警』『東京の敵』『国民国家のリアリズム』(共著)『明治維新で変わらなかった日本の核心』(共著)。

グーグルやフェイスブックが開発にしのぎを削る人工知能。深層学習（ディープラーニング）の進化によって「人間のよう考えるコンピュータ」の実現が見えてきて、政治、経済、教育、医療、労働、あらゆる領域において、私たちの世界は劇的に変化しようとしています。

人工知能が人間を超えたとき、起こりうる未来とはいったいどんなものなのか?!

世界の人工知能の研究水準のなかで日本はどのような位置にあり、日本の産業は生き延びることができるのか。日本を代表する人工知能研究者の松尾豊・東大准教授に存分に語っていただきます。

特別講演

人工知能は人間を超えるか?!

松尾豊氏

東京大学大学院工学研究科 准教授
産業技術総合研究所 人工知能研究センター 企画チーム長



司会 猪瀬直樹氏

作家、日本文明研究所所長



日時：2018年5月23日(水)

19時～21時(18時30分開場予定)

会場：日本経済大学東京渋谷キャンパス246ホール
(定員100名)

150-0031 東京都渋谷区桜丘町25-17

参加費：2,000円(当日、受付にてお支払いください)

参加申込先：下記のサイトよりお申し込みください。

<http://www.japancivilization.org/>

お問い合わせ先 一般財団法人日本文明研究所

TEL 03-5456-8082



伝統工芸品 紹介サイトのご案内

海外サイト：<https://shops.japancivilization.org>

日本国内サイト：<http://japancivil.shop9.makeshop.jp>

所長からのメッセージ

日本文明研究所では、シンポジウムに加え、伝統工芸品の紹介と販売を行っております。日本には現在約1200の伝統工芸品があるといわれますが、それらの生産基盤が衰退しつつあるのが現状です。当研究所は、活動の一環として、全国の貴重な伝統工芸の品々を掘り起こし、永々と受け継がれてきた日本人の匠の技や美を皆様とともに堪能し、育んでいけることを願っております。



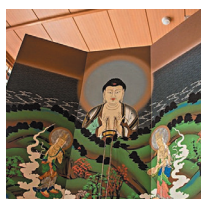
日本竹古風京都籠



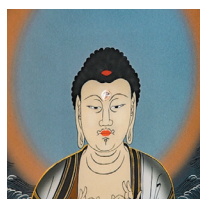
絨(おどし)サムライ鎧



つまみかんざし



山越阿弥陀
(半分タイプ)



山越阿弥陀
(原寸タイプ)



京焼 陶器